

## コロナ禍時代、ワイン産地の今

日本一のワイン産地をPRするため「ワイン県」宣言をした山梨県。ところが、新型コロナウイルスの感染防止に向けた外出自粛要請や飲食店の休業などの影響を受け、県内のワイナリーは苦境に立たされている。先行き不安にただ手をこまねているだけでなく、ウィズ・コロナ時代を見据えた動きも出始めている。

山梨県ワイン酒造組合によると、業界全体では低価格ワインが家庭消費を中心に堅調なもの、中価格帯よりはレストラン、飲食店向けの消費も多く、売り上げが落ち込んでいる。売値が重なる日本ワイン（国内で栽培されたぶどうを100%使用して国内で醸造されたワイン）も非常に出足が鈍いという。

インターネットを使った「オンライン飲み会」など自宅での消費傾向が強まっているのを踏まえ、ネット販売を強化したり送料を一部負担したりする取り組みもある。そうした中、産地の強みを生かしワイナリー同士がタッグを組んだワインセットが予想以上の売れ行きを見せている。

県内の若手醸造家グループ「アサンブラージュ」が6月に販売を始めたワインセット。消費者にとってはお得感もあって、注文開始から1カ月ほどで当初見込みの倍を売り上げた。県外からの注文が多く、リピーターもいるという。

アサンブラージュのメンバーは現在4人。6本のワインセットの銘柄は、手元に届いてからの楽しみとなっている。各社の定番ワインとぶどうジュースの計5本でまずセットを組み、この時点で販売価格の1万円。さらにもう1本特別なワインがおまけで付く。

複数社のワインが一度に届き、その時の気分で飲みたいワインを選べるバラエティーに富んだセットが好まれている要因だろう。

組合でも、今後の販売戦略について対応を急いでいる。安蔵光弘会長は「ワイン県の県民にとってワインは大事なものであるはずなので、意識を持ち1本でも多く飲んでほしい」と呼び掛け、まずは地元を取り込みたい考えを示している。

山梨日日新聞社 コンテンツ事業局部長 古畑昌利



写真左) ワインセットの組み合わせ例。ワイン5本、ジュース1本が入っている  
写真右) アサンブラージュワインセットを販売中のメンバー4人。左から久保寺慎史さん、若尾亮さん、前島良さん、萩原弘基さん＝山梨県甲府市桜井町